昭和50年7月12日 第三種郵便物承認 通巻第503号 第43巻 第2号 平成29年2月1日発行（毎月1回1日発行） ISSN 1343-5469

2017
2
FEBRUARY

日本を支える主役・中小企業を応援する

商工ジャーナル

SHOKO JOURNAL

特集：「攻めのIT」で突破する

新連載：商店街にぎわう。／円頓寺商店街（名古屋）

今を語る：安岡定子氏「素読で『論語』を学び、実践する」

今を語る　第168回

素読で『論語』を学び、実践する

安岡定子事務所代表
「こども論語塾」講師
安岡定子 氏

聞き手／編集主幹・渡部彰仁

傳通院から始まった「こども論語塾」

――先生は昭和の政財界人などに大きな影響を与えた陽明学者の故・安岡正篤氏のお孫さんで、現在、「こども論語塾」の講師として全国各地で子供たちに『論語』を教えているほか、企業やビジネスマン向けのセミナーや講演会でも『論語』の講演活動を行っておられます。やはり幼少の頃からおじいさまに『論語』を学ばれたのですか。

安岡　それが祖父とは同じ家で二十年以上一緒に住んでいたのですが、『論語』を含めて、古典の薫陶を受けたことは一度もないのです。国粋主義者とか日本の黒幕、昭和の碩学などといろいろ言われましたが、東洋の思想に親しみ、心身ともに堅固で、激することなく、温かい。そして、常に思索に耽っていたというのが私の知っている祖父の姿です。

――『論語』を学ばれたきっかけは。

安岡　私は大学で中国文学を学び、三十代になって子育てが一段落した頃、もう一度漢文を勉強したいと思うようになりました。そこで、当時住んでいた文京区の区民向け教養講座の『論語』の教室に通い始めたのです。その講師が湯島聖堂斯文会の常務理事をされていた田部井文雄先生で、『論語』に出てくる人物、特に孔子の弟子の人物像に焦点を当てながら、孔子と弟子のやりとりを、生き生きと、躍動感豊かに解説してくださいました。

私が学生時代に学んだ中国文学は、どちらかというと訓詁学に近く、中国古典の字句を正確に解釈するというものでしたから、それとはまったく違う田部井先生の講義を聴いて、「何て面白いんだろう」と思ったのです。そこからもっと『論語』を学びたいと思い、先生の三カ月の講座が終わった後も、その講座で知り合った四、五人の方と先生のほかの講座に移動して論語を学び続けました。

――「こども論語塾」はどのようにして始まったのですか。

安岡　田部井先生の講座で知り合ったお一人が経営者で、若者の育成にも関わっていらっしゃいました。その方が「『論語』のような哲学は若い人にこそ必要だ。そういう場所をつくれないか」と提案されて、先生も「面白いじゃないか」とおっしゃり、私たちも「やろう、やろう」と盛り上がり、文京区の傳通院というお寺をお借りして、親子で『論語』を学ぶ「こども論語塾」が始まったのです。

私はスタッフとしてお手伝いをするつもりでしたが、田部井先生が「僕の講座で学びながら自分で講師をするというのも十分できるから、やってごらんなさい」とおっしゃったので、「故きを温ねて新しきを知る」などの『論語』の有名な章句を子供たちと読み始めました。そのうちに「大人だけの講座を」というお話があり、『論語』を最初から最後まで読み通す大人向けの講座も始まったのです。

――始めるとき、迷いはなかったですか。

安岡　悩みました。それで、祖父のお弟子さんの中で一番古く、私も子供の頃から存じ上げていた大阪の伊與田覺先生のところへ相談に伺いました。伊與田先生は、祖父が一九八三年に亡くなったとき、心に大きな空白感を覚えられたそうですが、祖父の一周忌に、住友生命の社長を務められた新井正明さんの挨拶を聞いて衝撃を受け、残りの人生を『論語』の普及に捧げようと思い、『論語』を全文読み下し、全部の漢字に読みがなをつけた『仮名論語』という本を書かれました。

伊與田先生も「やってごらんなさい」とおっしゃってくださり、そういう方々が身近にいらしたことは、今も感謝しています。そして、祖父から直接『論語』を学んではいないけれども、日常生活の中で祖父が伝えてくれたものが、私の支えとなっていることは確かです。これらが講師を引き受けるうえで大きかったと思います。

PROFILE　安岡定子（やすおか・さだこ）氏

1960年、東京都に生まれる。二松學舍大学文学部中国文学科卒業。陽明学者・安岡正篤氏の孫。安岡定子事務所代表。現在、「こども論語塾」講師として全国各地で講座を開催し子供たちと保護者に『論語』を講義するほか、企業やビジネスマン向けの講演活動も行う。主な著書に『こども論語塾』（全3部）『己を高める、人を育てる　実践・論語塾』『子や孫に読み聞かせたい論語』『15歳の寺子屋　みんなの論語塾』『新版　素顔の安岡正篤』『はじめての論語』『えんぴつで論語』『心を育てるこども論語塾』『ドラえもん　はじめての論語』などがある。　（写真＝西村陽一郎）

声に出して読むことで『論語』の哲学が体に入ってくる

――先日、大人向けの論語塾に参加しました。江戸時代の藩校や寺子屋などで行われていた素読と同じ形式ですね。

安岡　「こども論語塾」では私の著書を、大人の講座では伊與田先生の『仮名論語』をテキストに使い、先唱役の私が「子曰わく」と読むと、生徒さんが「し・のたまわく」と続け、私が「巧言令色、鮮し仁」と読むと、生徒さんが「こうげんれいしょく、すくなしじん」と続けます。素読で大切なことは、「よい声を出して読む」、そのために「姿勢をよくして読む」、この二つだけです。漢文独特の美しい音とリズムで、『論語』の哲学が体に自然に入っていくので、とにかく声を出して読むことが大切です。

昔の日本人は、『論語』だけでなく、四書五経といわれるものにある程度触れていたと思うのですが、私の祖父は、若い十代の頃に音で『論語』を体に入れていくと、『論語』の文章には人の生き方や考え方の基が全部入っているので、自分が成長する過程でそれが熟成されて外に出てくる。だから若いうちに触れておく必要があるんだと言っていました。

――音読をすると気持ちがいいですね。

安岡　声を出して、大人数で唱和できるというのは、もともと文章が美しくないとできないのですね。日本の古典もそうですが、『徒然草』の「つれづれなるままに」とか『平家物語』の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」など、学校で学んだ最初のフレーズを多くの人が覚えています。それは古典と言われているものがいかに美しいリズムを持っているかの証明だと思います。

かといって、『論語』の内容に触れないのももったいないので、『論語』の中心思想である「仁」、思いやりとか誠実さとか、それを行動で表す「礼」の大切さなどについては、子供たちにも毎回話すようにしています。